

第5回名古屋大学博物館企画展記録
— 家族の肖像— 分岐する世界と統合する意識—
アーティスト小川信治と11人の名大生によるコラボレーション

Records of the 5th NUM Special Display
“Conversation piece”: how to create family stories and portraits through
psychological collaboration of an artist and university students

足立 守 (ADACHI Mamoru)

名古屋大学博物館
The Nagoya University Museum, Chikusa, Nagoya 464-8601, Japan

会 場：名古屋大学博物館
会 期：平成17年1月19日～2月18日

この記録は、第5回企画展の展示内容および展示コーナーについてまとめたものである。企画展の内容や狙いについては、以下の二つの出版物に詳しく述べられているので、ここでは重複を避けてポイントだけを簡単に報告する。

- ・ 家族の肖像プロジェクト（編）（2006）：家族の肖像 レイモンド・チョーサーと三つの家族，96p，エリプスガイド。
- ・ 縣 拓充・岡田 猛（2006）：企画展『家族の肖像』における芸術家の制作プロセスの展示とその効果の検討。名古屋大学博物館報告，No.22, 277-292.

ごあいさつ

このたび、第5回名古屋大学博物館企画展として、『家族の肖像—分岐する世界と統合する意識—アーティスト小川信治と11人の名大生によるコラボレーション』を開催する運びとなりました。

この企画展は、これまでの特別展・企画展と違って、標本や資料の展示を中心としたものではありません。名古屋大学教育発達科学研究科の岡田 猛助教授によるユニークな心理学の授業（心理学基礎セミナー）とその研究チームによる研究の一部を取り扱ったものです。その点で、従来型の展示ではなく、ある意味で“実験的な展示”となっています。大学博物館だからこそできる企画だと思えます。



図1 第5回企画展チラシ

ここで取り上げたアーティストと名大生によるコラボレーションは、岡田の「芸術家の創作心理」の研究が基礎になっています。現代美術家の小川が集めた何の関連性もない60枚の古い写真やアンケートをもとに、3つの異なったグループの学生が3つの架空の物語を考え、それぞれの物語に対して小川（この企画展の中では、レイモンド・チョーサーという架空の画家となっている）が、試行錯誤しながら絵を制作していくプロセスを多少なりとも分かっていただけだと思います。

同時に、この企画展が名古屋大学の教育研究の一端を知ってもらうきっかけになれば幸いです。企画展開催にあたり、ご協力いただいたオフィス・マッチング・モウルの内藤美和さんにお礼申し上げます。

2005年1月19日

名古屋大学博物館 足立 守

展示コーナー

展示コーナーは大きく4つの部分から構成された。

- (1) 導入部：企画展の概要に関するパネルとアーティスト小川信治が学生に提示した60枚の写真
- (2) 3グループの学生11人が創作した3つの架空の家族（シュタイン家、アンドリュウとウィリアム家、スペンサー家）の物語
- (3) それぞれの物語に対して小川（この企画展の中では、レイモンド・チョーサーという架空の画家）の制作した絵
- (4) 上記の3つのコーナーから少し離れた場所における絵の制作過程に関する認知心理学研究コーナー

この企画展は岡田助教授の授業および認知心理学の研究に使われるなど実験展示の要素が大きく、その点で、ユニークなものであった。



図2 架空の家族の物語の作成に使われた写真の一部（家族の肖像プロジェクト、2006より）



図3 展示風景



図4 ギャラリートークの風景

企画展関連の特別講演会（ギャラリートーク）

日時：2005年1月29日（金）午後3時から

場所：名古屋大学博物館展示室

講師：岡田 猛（教育発達科学研究科助教授）と小川信治（現代アーティスト）

ギャラリートークの内容：企画展「家族の肖像」の背景・狙い・謎解き